

【資料1】

総合科学技術・イノベーション会議

教育・人材育成ワーキング・グループ(第4回)

2021/11/25

教育・人材育成政策パッケージ策定に向けた 中間まとめについて(案)

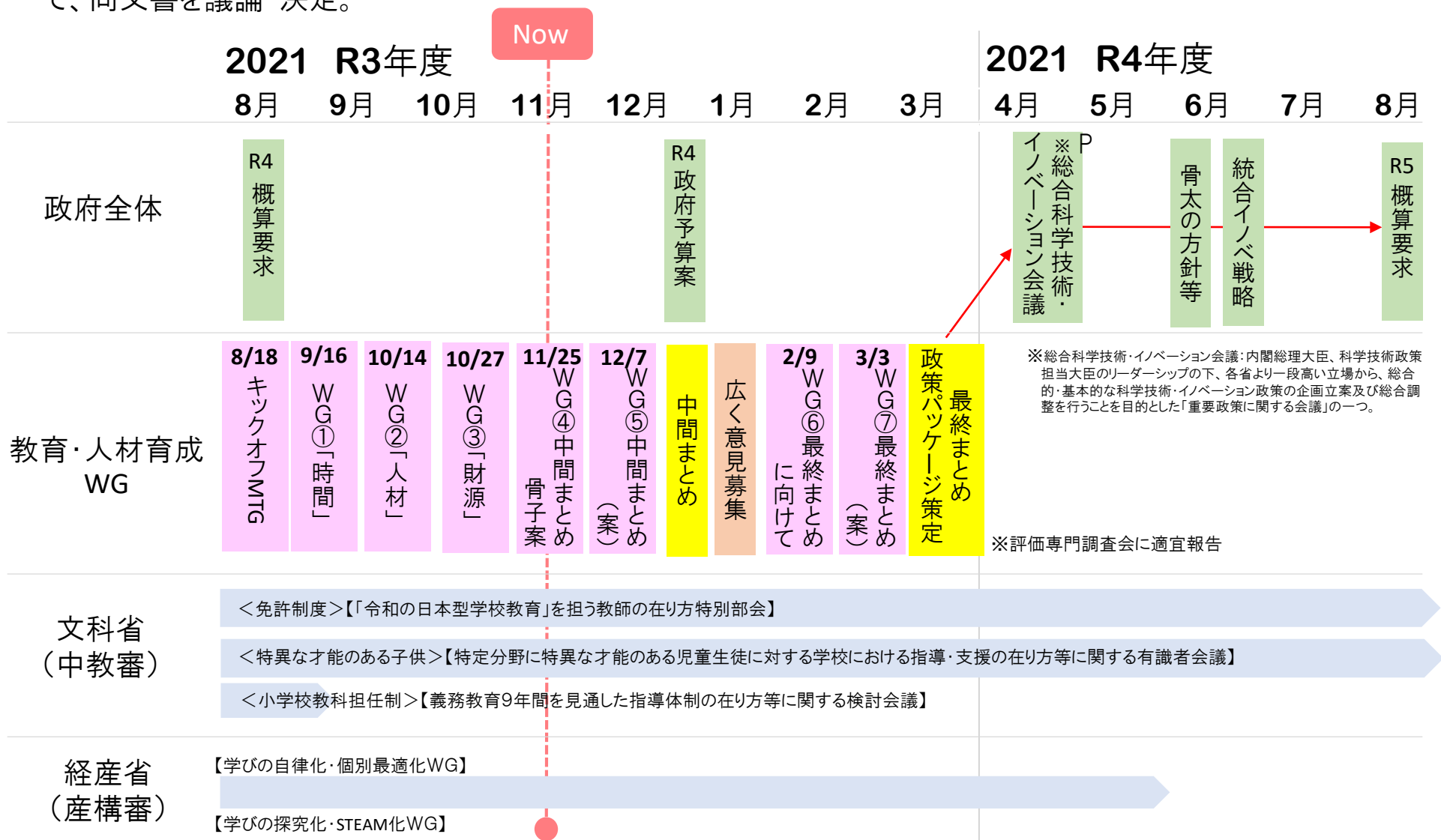


令和3年11月25日

内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局

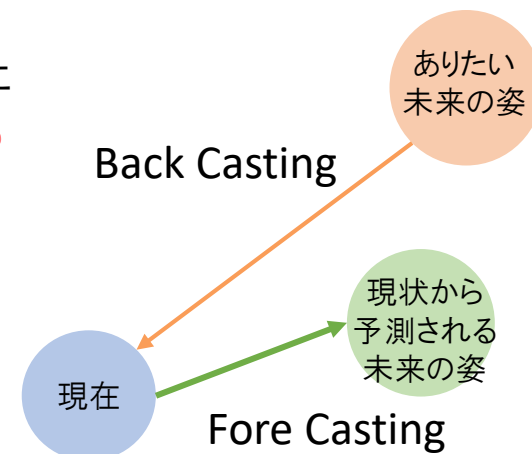
本WGの今後の流れについて（予定）

年内に中間まとめ（政策パッケージの枠組み、目指すべきイメージの共有）を行い、年明けに国民から広く意見募集を行った上で、最終まとめ・政策パッケージ策定に向けて、各政策の目指すイメージ、必要な施策・ロードマップについて議論を深め、年度内に最終まとめ・政策パッケージ策定。その後、総合科学技術・イノベーション会議（P）において、同文書を議論・決定。



政策パッケージの作成方針・骨子（案）

- これまで幾度となく、異口同音で語られてきた新しい学びの必要性や学びの姿に加え、急速に進んだ一人一台端末整備やオンライン環境の浸透、デジタル社会の進展等を踏まえ、Society5.0の実現に向けた**目指す教育・人材育成像、学校・教室の姿、人材育成のあるべき姿などを具体的に描く。**
- それを実現するために、バックキャスティングで、
 - ①乗り越えるべき課題
 - ②必要な施策、検討の方向性
 - ③実現に向けた5年程度のロードマップをまとめていく。



Demand side 子供目線で

これまでのSupply Side
行政から脱却し、
Demand Side行政(子
供目線)への転換を

既存スキームに 囚われない

これまでの部分最適に
なりがちな対応策の積み
重ねの発想から脱却し、
府省庁横断的・オール
ジャパンな視点で

社会構造全体を 俯瞰した視点で

初等中等教育～高等教
育への縦のつながり、そ
の後の社会、子供をとりま
く社会構造全体を俯瞰し
た視点で

時にアジャイルに

トライ&エラーも前提に、
完全性を求めることなく、
アジャイルに軌道修正、
進化・発展していく視点も

わかりやすく

教育・人材政策は、
教育界だけでなく、社会
全体の理解が不可欠で
あるため、わかりやすく、
読みやすい構成で

11/25WGで議論

1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化

- (1) 社会構造の変化・必要となる思考・発想の変化
- (2) デジタル社会における子供たちを取り巻く環境
- (3) 認識すべき教室の中にある多様性・子供目線
- (4) 先細る理系人材・ジェンダーの偏り

政策の方向性を打ち出す上で踏まえるべき部分、本パッケージの立ち位置など

2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

社会構造の変化を踏まえた大きな教育・人材育成像

3. 実現に向けたロードマップ

<政策1> 子供の認知特性を踏まえた学びの「時間」と「空間」の多様化

- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

年明けに議論

12/7WGで議論

<政策2> 探究・STEAM教育を社会全体で支えるエコシステムの確立

- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

年明けに議論

12/7WGで議論

<政策3> 文理のアンバランス・ジェンダーギャップの解消

- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

年明けに議論

12/7WGで議論

1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化

(1) 社会構造の変化・必要となる思考・発想の変化

コロナを機に急速に進んだデジタル化。DX時代(デジタル・トランスフォーメーション)においては、これまでの業界や企業の縦割り構造・自前主義で経済成長を遂げてきた工業化社会とは反対方向の縦割りを越えた横割りのレイヤー構造の中で、プラットフォーマーが世界を席巻するなか、自前主義を脱し、他企業・他業界等と連携しながら、自分たちのエッジを効かせた価値を創出するビジネスモデルが広がる。このような新しい時代を支える人材の思考・発想も大きな転換が求められており、Society5.0の実現に向けて、人材育成やその根幹となる公教育の在り方も構造転換が求められる。

これまで 今・これから

工業化社会

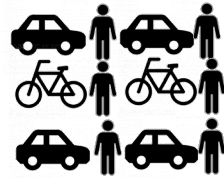
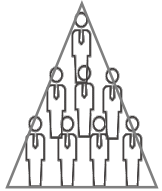
大量生産・大量消費

縦割り

自前主義

新卒一括採用・
年功序列

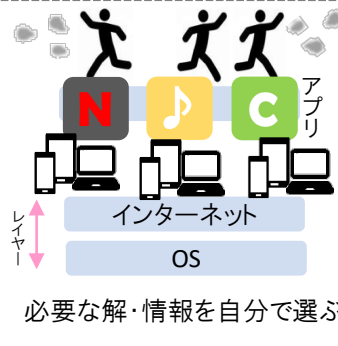
与えられたゴールまで
最短距離で



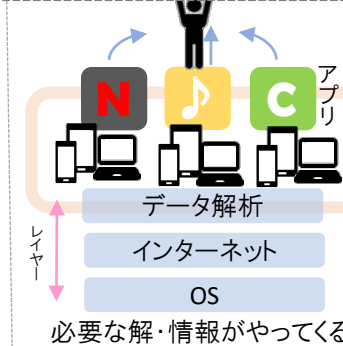
沢山作って沢山売る
「モノ」を所有



ピラミッド組織の人の力で
媒体を繋ぐ



必要な解・情報を自分で選ぶ



必要な解・情報がやってくる

思考・発想

- 工業化という方向性が明確「先進国に追いつこう！」
- 大量生産・大量消費が基本で、顧客のニーズにきめ細かく対応するために、縦割り構造の細分化で対応
→連続的なイノベーション

具体 抽象

- 正解がない「新しい価値創造、イノベーション創出」
- 「分野と関係なく一気に解ける」アプローチの強さ(プラットフォーマー)
- 誰でも使えるレイヤー(ex.クラウド)を活用した価値創出
→非連続的なイノベーション

身内で よそ者と

- 身内のコミュニケーション・人間関係を大切に
(飲み会、社員旅行、ウチの会社、ウチの業界)
- 業界内での競争(業界〇位)

- 分野や業界を超えた「よそ者」と一緒に
パートナーになれる相手はどこにでもいる
- 特定の業界内の競争のみでなく、分野を超えた競合が当たり前

Society5.0 DX Digital Transformation

新たな価値創造

レイヤー構造

分野・業界を
超えた連携

人材の流動化

当事者意識をもって
自らゴール設定を



(2) デジタル社会における子供たちを取り巻く環境

OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2018によると、日本の子供のICT活用状況は、OECD加盟国間の比較において、学校の授業での利用時間が短く、学校外では多様な用途で利用しているものの、チャット、ゲームの利用に偏る傾向がある。また、スマートフォンは、10年前にはほとんど子供たちは持っていなかったが、現在のスマホ保有率は、高校生は99.1%、中学生が84.3%と非常に高く、「フィルターバブル現象」の中で日常的に情報に触れていることに気づかない状況や、大人が想像する以上に子供にかかる「同調圧力」の影響は非常に大きい。

学校外での平日にデジタル機器の利用状況(高校1年生)※1 2018年

「毎日」「ほぼ毎日」の合計

- コンピューターで**宿題**をする
- ネット上で**チャット**する



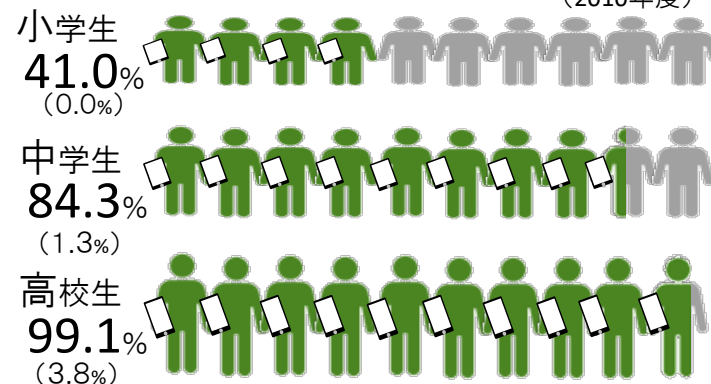
- 1人用**ゲーム**で遊ぶ



- インター**ネット**で**ニュース**を読む

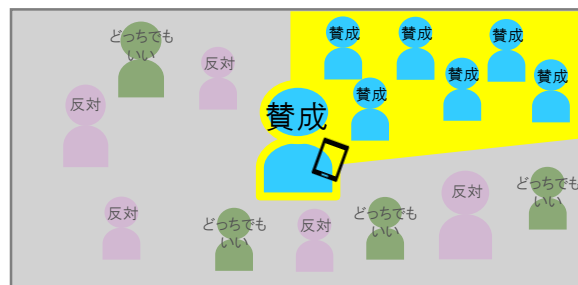


子供専用のスマホ保有率 ※2 2020年度 (2010年度)



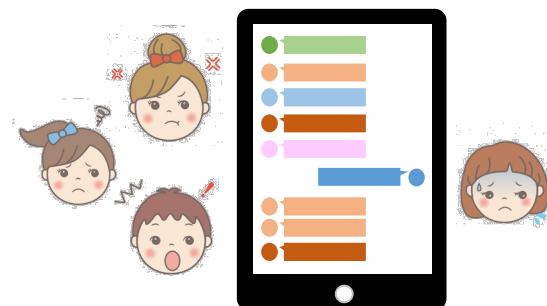
フィルターバブル現象

アルゴリズムにより、自分の考えや嗜好に合う情報がフィルターを通り抜けて提示されるようになり、多様性を欠いた自分の好む情報「だけ」に囲まれ、その他の情報から隔離されやすくなる状況。



学校外でも同調圧力

日本の子供のチャット利用率は非常に高く、昼夜問わず、グループでのやりとりやメッセージの既読確認ができる環境は、学校外にいても、同調圧力・ヒエラルキーが生じやすい状況。



(出典)※1 OECD 生徒の学習到達度調査 PISA2018をもとに内閣府で作成

※2 内閣府 令和2年度 青少年のインターネット利用環境実態調査結果をもとに内閣府で作成。平成26年度より調査方法等を変更したため、平成25年度以前の調査結果を直接比較ができないことに留意。「小学生」の調査対象は、満10歳以上。

(3) 認識すべき教室の中にある多様性・子供目線 (小学校のイメージ：一例)

9

発達障害やギフテッド、家で日本語を話す頻度が少ない子供、家庭の文化資本の差による学力差等、学級には様々な特性を持つ子供が存在し、これらの特性が複合しているケースもある。同学年による同年齢の集団は、同調圧力が働きやすく、学校に馴染めず苦しむ子供も一定数存在し、不登校・不登校傾向の子どもは年々増加の一途をたどっている。さらには、一斉授業スタイルでは、一定の学力層に焦点を当てざるを得ず、結果として、いわゆる「浮きこぼれ」「落ちこぼれ」双方を救えていない現状。

このように、子どもたちが多様化する中で、教師一人による紙ベースの一斉授業スタイルは限界に来ている。

発達障害の可能性のある子供 (学習面or行動面で著しい困難を示す)

発達障害※1
2.7人
(7.7%)

- ・ADHD(注意欠如多動性障害)
いつもそわそわして、じっと座ってられない。いろいろなものに気が散り、授業に集中できない。
- ・LD(学習障害、読字障害)
文字が流暢に読めなかったり、板書に時間がかったりして、授業の進度に合わせられない。
- ・ASD(自閉症スペクトラム)
学習活動の見通しが持てないと不安になる。暗黙のルールがわからず、突然発言してしまう。

家にある本が
少ない子供 ※5
10.4人
(29.8%)

家庭の文化的資本の違い

家にある本の冊数が少なく
学力の低い傾向が見られる子供

※家にある本の冊数と正答率の間には相関 家にある本が10冊又は25冊と答えた割合

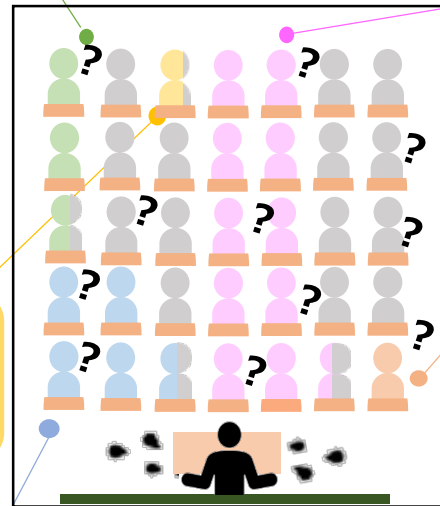


家で日本語を
あまり話さない子供※5
1.0人
(2.9%)

家で日本語を話す頻度の違い

家で日本語を「いつも話している」子供と「全く話さない」子供の間には、正答率に差が見られる

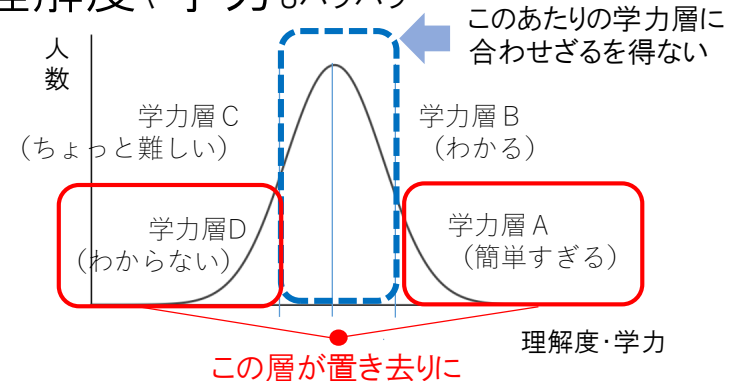
※家で日本語を「全く話さない」「ときどき話す」と答えた割合



小学校 35人学級

【特別支援教育を受ける児童生徒割合】
・特別支援学校:0.8%
・特別支援学級(小・中学校等):3.1%
・通級による指導(小・中学校等):1.4%

理解度や学力もバラバラ



ギフテッドの可能性のある子供

授業が暇で苦痛。価値観や感じ方の共感も得られなくて孤独。発言すると授業の雰囲気壊してしまう。

Gifted※2
0.8人
(2.3%)

小3から中学数学、小5で数ⅡBをやっていた。
4歳のころ進化論を理解して、8歳で量子力学や相対性理論を理解していた。

不登校・ 不登校傾向の子供

不登校※3
0.4人
(1.0%)

不登校傾向※4
4.1人
(11.8%)

【出典】※1 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 平成24年12月 (文部科学省) 「2.7人(7.7%)」の数字は、ADHD、LD、ASDの内訳を示したものではありません。

※2 日本には定義がないため、IQ130以上を仮定。知能指数のベルカーブの正規分布、子どもの吹き出しは、文部科学省 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議アンケートを参考に編集

※3 不登校 年間に連続又は断続して30日以上欠席 (令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省))

※4 不登校傾向 年間欠席数30日未満、部分登校、保健室登校、部分登校など含む(不登校傾向にある子どもの実態調査(日本財団))

※5 令和3年度 全国学力・学習状況調査 児童質問紙、生徒質問紙結果より内閣府において作成。全国平均値等を1クラスに仮に見立てた場合のイメージ図。実際には偏在等は生じている可能性が有る旨留意。

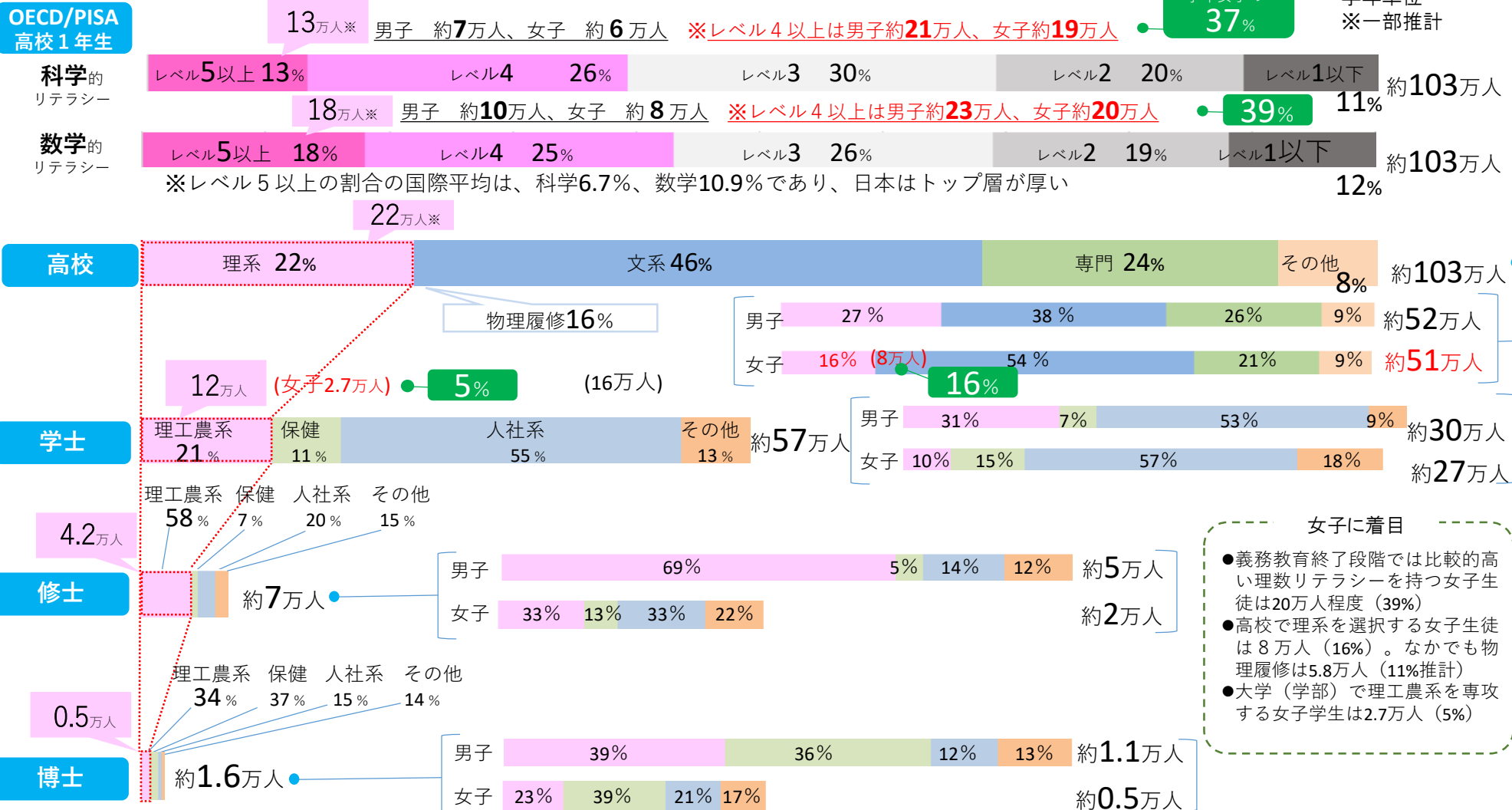
児童生徒質問内容:あなたの家には、およそどれくらい本がありますか。(家にある本の冊数は、家庭の社会経済的背景を表す代替指標の1つ)

児童生徒質問内容:あなたは、家でどれくらい日本語を話しますか。(家で日本語を話す頻度の状況を確認するための質問事項)

(4) 先細る理系人材、ジェンダーの偏り①

高校教育～大学・大学院教育における専攻分野の推移

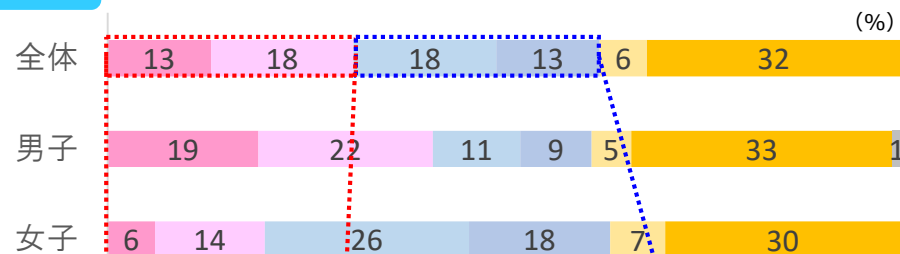
義務教育終了段階では、比較的高い理数リテラシーを持つ子どもが約4割いるにもかかわらず、高校段階では、文理別のコースを選択するシステムも契機になり、理系が2割と半減。さらに、大学入学時には学士は入学定員とも関連して、約1割に半減し、修士・博士と先細っていく状況。特に、女子の理系離れは深刻であり、学士の理工農系進学は、女子全体のうち5%にすぎない。



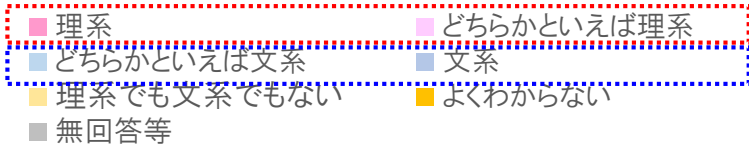
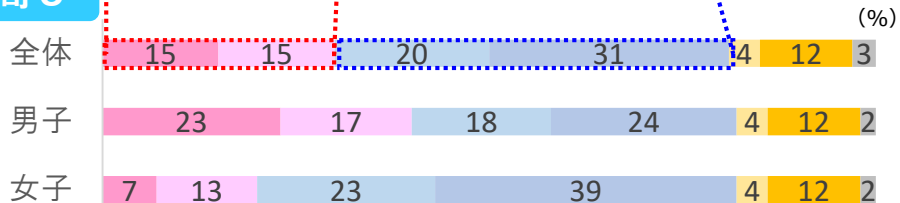
文系・理系への「志向」の変化としては、中学校→高校では、理系志向の割合は増えず、中学生のときに「わからない」と答えていた層が、高校生になると文系志向に移行している状況。高校における学習コースの文系・理系のコース分けは、66%の高校で実施しており、大学進学を希望する生徒の割合が高い高校ほど実施率が高く、高1の秋には文理の選択を迫られ、文理分断されている状況。

理系文系の「志向」の変化(中3・高3)

中3



高3



高校の学習コース(高3)

3校に2校がコース分け

高校の3校に2校(66%)では、文系・理系のコース分けを実施。大学進学を希望する生徒の割合が高い高校ほど、実施率は高くなる。

高1秋頃にコース選択

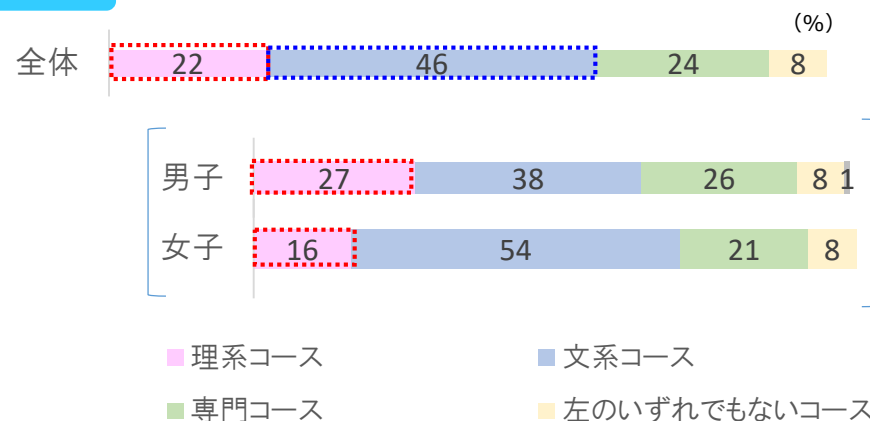
コース選択時期は高1の10月～12月、コース開始時期は高2の4月からが大半。

「志向」と「学習コース」の不一致も一部発生

「志向」があっても「学習コース」はなんらかの理由で異なる選択をしている子供も少なくない状況。

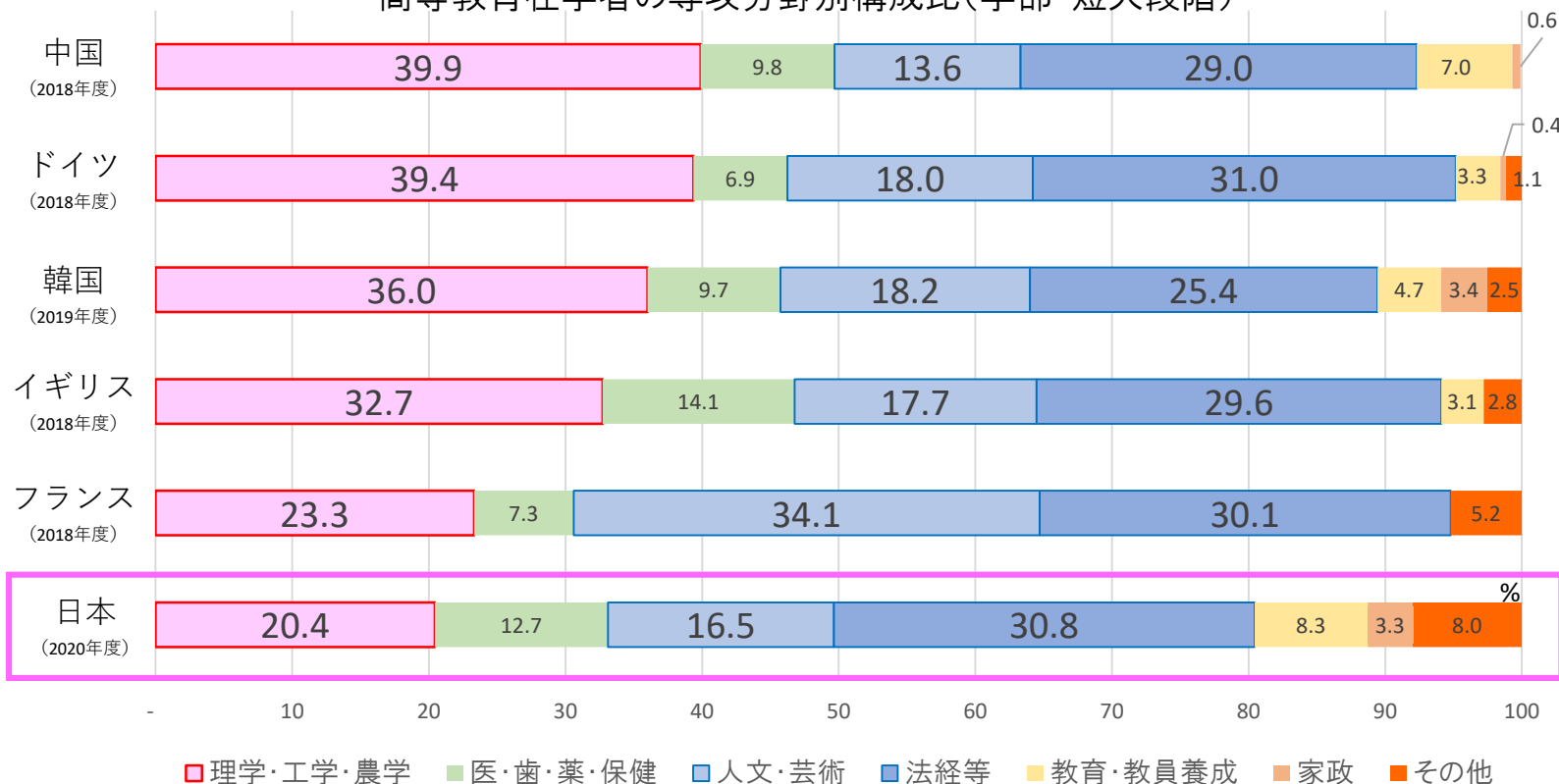
理系志向だけど文系コースにいる 8%
文系志向だけど理系コースにいる 13%

高3



高等教育在学者の専攻分野別の構成比について、諸外国と比較した場合、明らかに理学・工学・農学系の比率が低い。

高等教育在学者の専攻分野別構成比(学部・短大段階)



(出典)文部科学省「諸外国の教育統計」令和3(2021)年版より内閣府において作成

(注)日本:在学者数は、大学学部、短期大学本科及び高等専門学校第4、5学年の在学者の合計。「その他」は、教養、国際関係、商船等。

イギリス:大学の学部レベル(第一学位及び非学位課程)のフルタイム在学者数。農学には獣医学を含む。「その他」は情報サービス・メディア・ジャーナリズムを含むマスコミュニケーション等。

フランス:在籍者数は、国立大学学士課程及び技術短期大学部の在籍者の合計。「その他」は、体育・スポーツ科学である。本土及び海外県の数値。

ドイツ:大学院レベルの学生も含む、大学及び専門大学の在学者の分野別構成。教育・教員養成学部以外で教員資格の取得を目指す学生は、各専攻に含まれる。

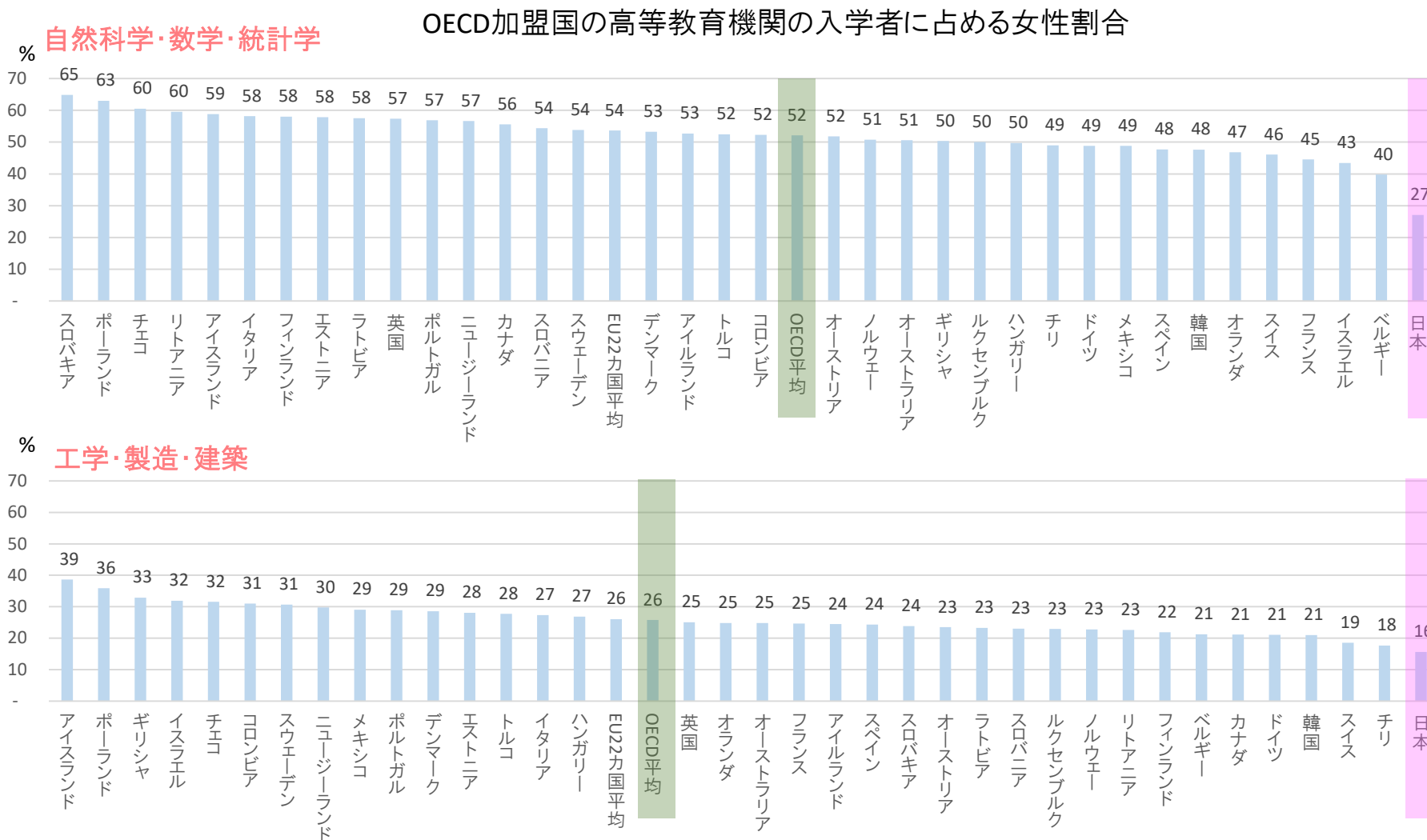
全学生2,868,222人のうち、大学院レベルの学位(ディプロム、修士、博士)の取得を目指す学生は1,033,126人いる。

中国:在学者数は、大学、専科学校及び職業技術学院の学生数。教育・教員養成は「教育学」のみ。

韓国:在学者数は、大学学部、専門大学、教育大学、産業大学、技術大学の在学者の合計。「その他」は体育。

(4) 先細る理工系人材、ジェンダーの偏り④ 女性の理工系人材育成のアンバランスな状況

大学などの高等教育機関に入学した学生のうち、STEM分野に占める女性割合は、OECD加盟国中、日本は最低であり、女性の理工系人材の育成が極めてアンバランスな状況。



2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

統制のとれた組織のもとで機械・設備に合わせて標準化される工業化社会においては、同質性・均質性を備えた一律一様の教育・人材育成が求められ、一斉授業・平等主義のもとに世界トップレベルの教育・人材育成システムが日本の大きな経済成長を支えてきた。しかし、人口減少・少子化の深刻化とともに、今、目の前にある「新たな価値創造」「イノベーション創出」「一人ひとりの多様な幸せ」を目指すSociety5.0時代、DX、そしてアフターコロナという大きな時代の転換期にある今、教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務。

これまで

工業化社会 大量生産・大量消費

巨大化する都市環境 指数関数的な人口増

経済成長

新卒一括採用・年功序列



同質性・均質性
一律一様の教育・人材育成

一斉授業

平等主義

みんな一緒に みんな同じペースで みんな同じことを



測りやすい力

重視

限られた時間で
自らの記憶や
思考だけを頼り
に素早く正確に
解く力を評価

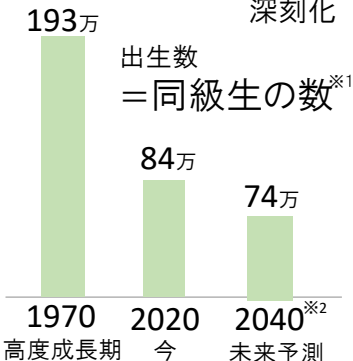
縦割り構造

学校種、学校、
学年、学級、教
科などの縦割り
構造に基づく
教育の提供

社会的・文化的
バイアス

学びや進路の
選択を制約する
バイアスの存在
(女子の文理選
択、直線的な進学
だけが選択肢)

人口減少・少子化の
深刻化



世界トップレベルの
教育システム

~~同調圧力~~
~~正解主義~~

価値創造やイノベーション創出の
最大の敵

一人一台端末
オンライン環境の整備
コロナで進んだデジタル化



今、これから

新たな
価値創造

イノベーション



SDGs

Society5.0

一人ひとりの多様な幸せ well-being

DX



地球規模課題 多様性 安全・安心
AI 人材の流動化 総合知

多様性を重視した教育・人材育成

個別最適な学び

協働的な学び

それぞれのペースで自分の学びを 対話を通じた「納得解」の形成



探究力重視

自ら学びを調整し、
社会に生きる学び
や試行錯誤しながら、
自ら課題を設定
し課題に立ち向かう
「探究力」を評価

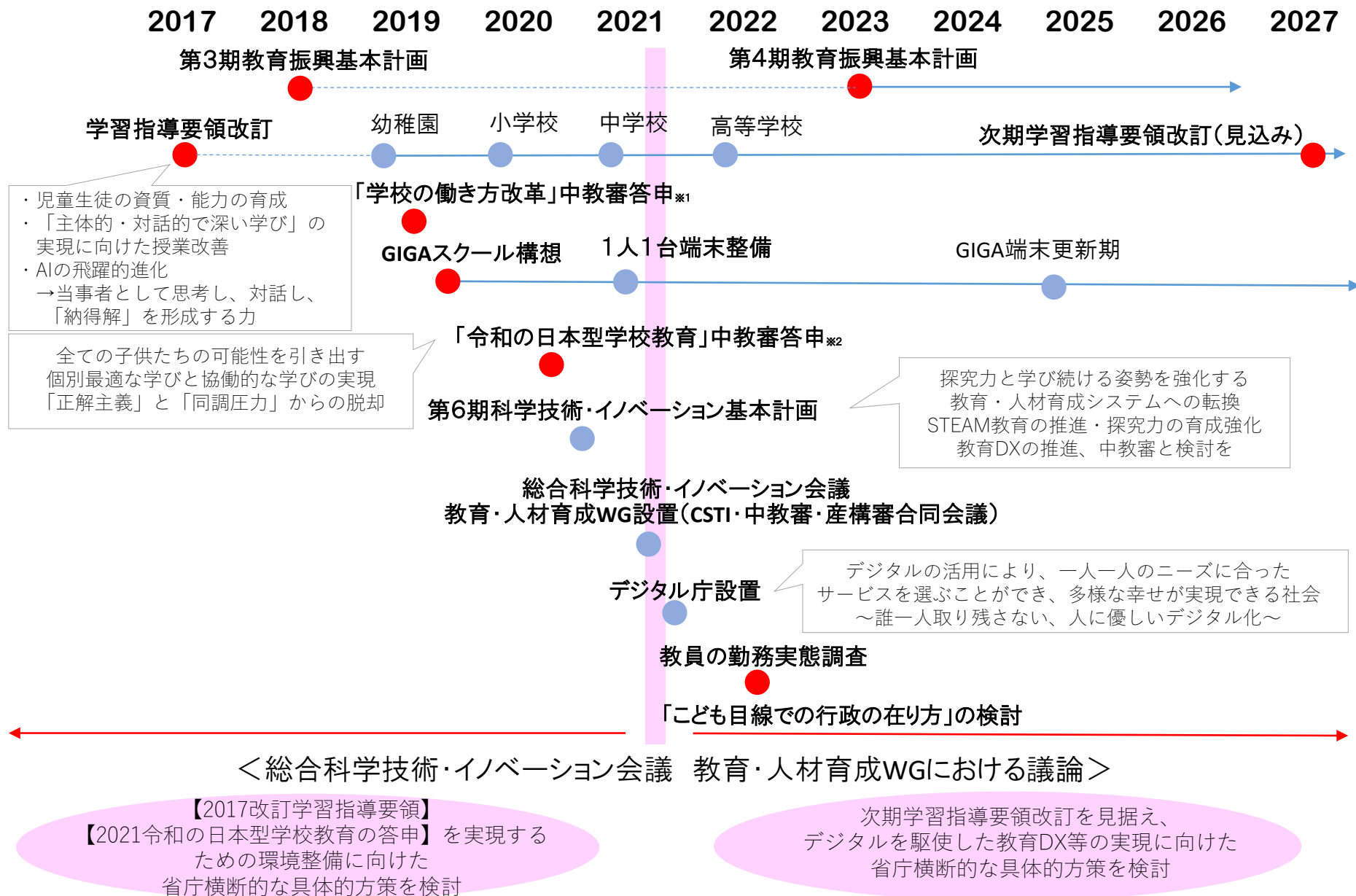
社会とシームレスな
レイヤー構造

社会や専門的な
力を入れて、
一人ひとりの認知
の特性を踏まえ
て、その力をさら
に伸ばす構造

子供の主体性

大人の成功体験
や経験にとらわれ
ず、子供の好奇心
や個人の興味・関
心に応じた学びや
進路選択の実現

今後5年程度を見据え、制度の改善やリソース(時間、人材、財源)の確保と再配分が必要
その実現には、各府省等や関係者が確実に取り組むための見取り図とそれを踏まえた実行が急務



※1 新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)(第213号)(平成31年1月25日)

※2 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)(令和3年1月26日)

(参考) ここ最近の教育政策と本政策パッケージの関係性②

- 2017～2019年の学習指導要領改訂の後、2019年GIGAスクール構想による情報端末整備、コロナ禍を経て、本年1月の「令和の日本型学校教育」の中教審答申がまとめられた。同年3月に「第6期科学技術・イノベーション基本計画」が策定され、同計画に基づき、総合科学技術・イノベーション会議に「教育・人材育成WG」が設置された。
- これらの動きは、新学習指導要領が2020年度より小学校から段階的に実施され、全国約100万人の教師が、今必死に取り組んでいる中、全く異なる文脈で新しい改革が議論、進行しているのではなく、すべて新学習指導要領が目指している資質・能力の育成や「主体的・対話的で深い学び」の実現のためである。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現の上で重要なことは、子供の学ぶワクワク感、教科の学びが自分の設定した課題の解決に活きているという実感、自分の学びを自分で調整する力をどう育むか、である。このWGの議論の目的は、子供たちからこれらの力を引き出すべく取り組んでいる教師の努力を政府としてどうバックアップするかということであり、さらには、現在の新学習指導要領に対応するための教師の今の取組が、次の学習指導要領改訂や今後の学習環境の整備に確実につながっていくことも重要である。
- そのために、次期学習指導要領改訂や来年度実施予定の教員勤務実態調査、「こども目線での行政の在り方の検討・実現」などの今後の動きも見据え、今後5年程度という時間軸のなかで子供たちの学習環境をどのように整えていくのか、各府省を超えて政府全体としてどのように政策を展開していくのか、そのロードマップの作成を目指すことが、本政策パッケージ策定の目的である。

<論点1> 政策パッケージの骨子

政策パッケージの全体の柱建てとして適切かどうか。

<論点2>

1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化

教育・人材育成政策の方向性を打ち出す上で、踏まえるべき現状認識や、本政策パッケージの立ち位置などを示す内容として、適切かどうか。

<論点3>

2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

方向性として適切かどうか。

<論点4>

3本の政策について

次回12/7の議論に向けて、それぞれの政策について、目指すイメージや盛り込むべき施策などについて、事前にご意見があれば。

1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化

- (1)社会構造の変化・必要となる思考・発想の変化
- (2)デジタル社会における子供たちを取り巻く環境
- (3)認識すべき教室の中にある多様性・子供目線
- (4)先細る理系人材・ジェンダーの偏り

2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

3. 実現に向けたロードマップ

<政策1> 子供の認知特性を踏まえた学びの「時間」と「空間」の多様化

- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

<政策2> 探究・STEAM教育を社会全体で支えるエコシステムの確立

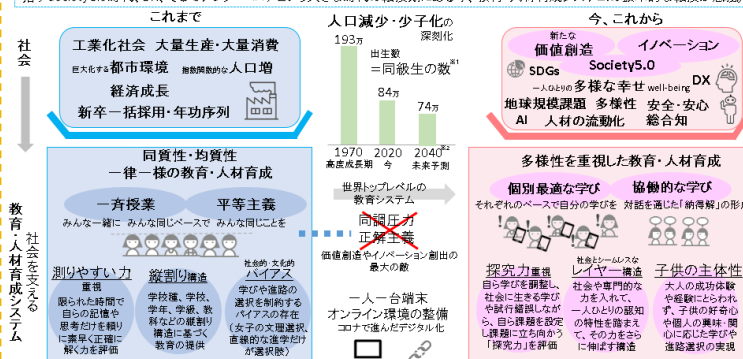
- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

<政策3> 文理のアンバランス・ジェンダーギャップの解消

- ・目指すイメージ
- ・必要な施策・検討の方向性
- ・ロードマップ

2. 教育・人材育成システムの転換の方向性

統制のとれた組織のもとで機械・設備に合わせて標準化される工業化社会においては、同質性・均質性を備えた一律一様の教育・人材育成が求められ、一斉授業・平等主義のもとに世界トップレベルの教育・人材育成システムが日本の大きな経済成長を支えてきた。しかし、人口減少・少子化の深刻化とともに、今、目の前にある「新たな価値創造」「イノベーション創出」「一人ひとりの多様な幸せ」を目指すSociety5.0時代、DX、そしてアフターコロナという大きな時代の転換期にある今、教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務。



今後5年程度を見据え、制度の改善やリソース（時間、人材、財源）の確保と再配分が必要
その実現には、各府県等や関係者が確実に取り組むための見取り図とそれを踏まえた実行が急務

參考資料

子供たちが多様化する中で
紙ベースの一斉授業は限界

多様な子供たちに対してICTも活用し
個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実

発達障害

※「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」(H24)

Gifted

教師による一斉授業
一定のレベルを想定した
授業展開

主体

子供主体の学び

子供の理解度や認知の特性
に応じて自分のペースで学ぶ

発達障害

認知の特性を自ら知るとともに、
周囲も理解し支援しながら、
自分のペースで学びを進めることができる

Gifted

特異な才能のある分野を
伸ばすため、大学や研究
機関で学ぶことができる

家庭や経済力、認知の特性や興味などが異なる
子供たちが「協働」で学ぶ機会の確保が公教育の肝
(協働的な学びの重要ツールが情報端末であり、
そのためには情報モラルが重要)

同じ教室で

集団行動が
基本となる教室で

空間

教室以外の選択肢

教室になじめない子供が
教室以外の空間でも

同一学年で

同一学年で構成され
該当学年の学び

学校種 学年

学年に関係なく

学年・学校種を超える学び
や学年を遡った学びも

教科ごと

教科担任制のもと
教科ごとの指導

教科

教科横断・STEAM

教科の本質の学びとともに、
教科の枠組みを超えた
実社会に生きる学びを

Teaching

指導書のとおり計画を立て
教える授業

教師

Coaching

子供の主体的な学びの
伴走者へ

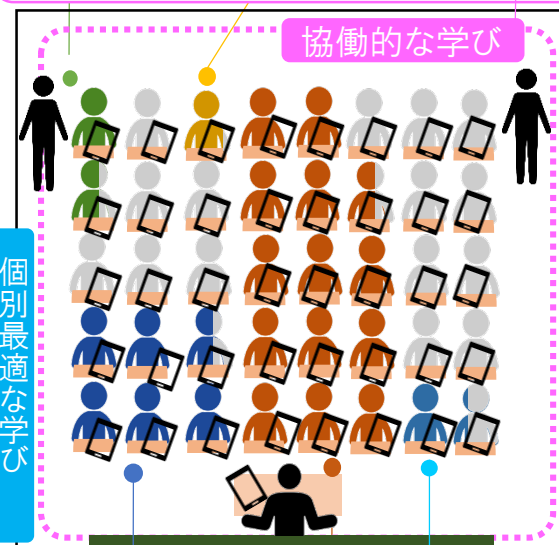
同質・均質な集団

教員養成学部等を卒業し、
定年まで勤めることが基本
万能を求められる教師

教職員 組織

多様な人材・協働体制

多様な教職員集団
理数、発達障害、ICT、
キャリアなど専門性を
活かした協働体制



個別最適な学び

不登校・不登校傾向

公立オルタナティブスクール
(教育支援センター、不登校特
例校、夜間中学とNPO等が連
携)、フリースクール、適応指導
教室などで学ぶことができる

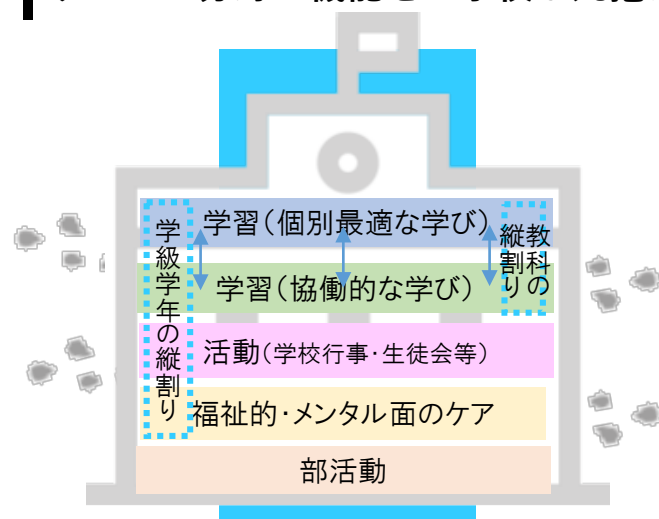
日本語を家で あまり話さない子供

特別なカリキュラム組み、
ICTも活用しながら、日本
語習得と同時に学びを
進めることができる

家にある本の冊数が少なく
学力の低い傾向がみられる子供

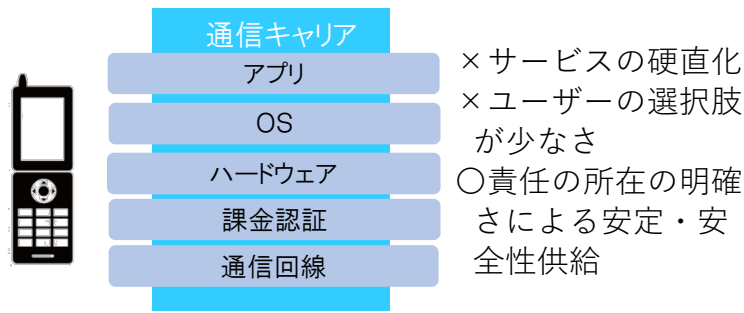
タブレット等の活用により自分のペースで着実に自分の
理解に応じて学びを進めることができる

すべての分野・機能を一学校が丸抱え状態

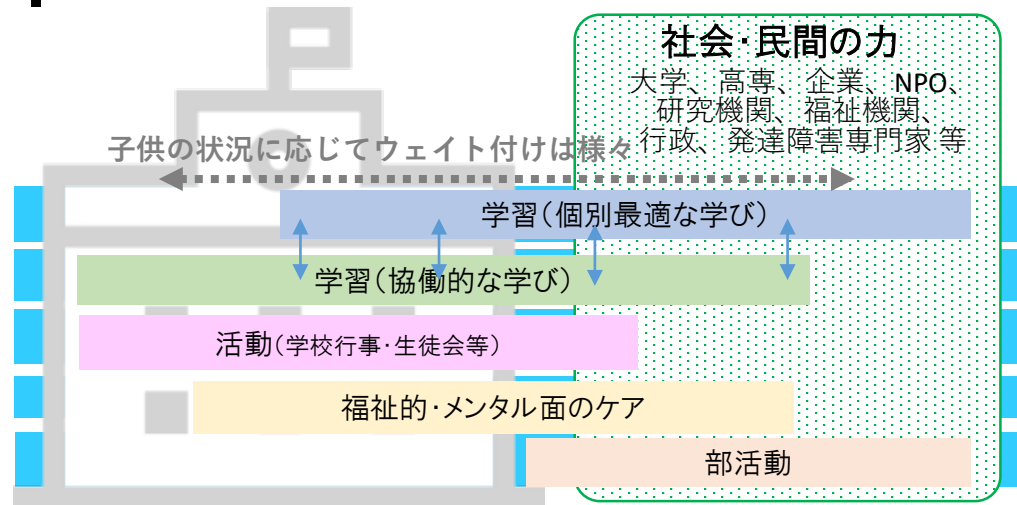


- 学級という集団の中で質の高い一斉授業を行うことにより、体系的なカリキュラムの実施や対話や協働を重視した学びが可能
- 学校の責任のもと、教科指導、特別活動、部活動などを通して全人的教育を行い、福祉的機能も担う
- ✕手続的・形式的な公正やルールが重視され、過度の同調性や画一性をもたらすことも
- ✕子どもたちの認知の特性や関心に応じた個別性の高い教育を実現するためには、時間や人材などのリソースが十分ではない

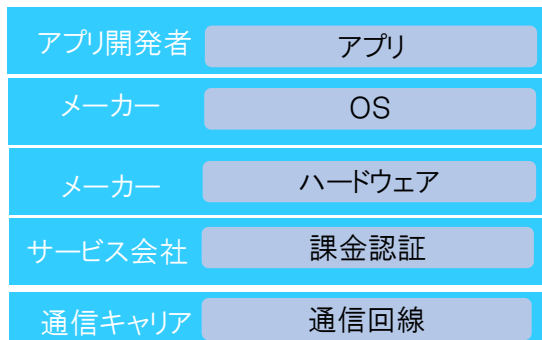
参考



分野や機能ごとにレイヤー構成、様々なリソースを活用



- ✕学び方が時間的に空間的にも多様化すると、学びの体系性や集団としての教育の機能が弱くなる可能性
→ スタディログなどにより子供の学びを教師が把握し伴走するとともに、協働的な学びの場を確保する必要
- ✕学びや体験活動などの実施主体や責任の所在が不明確になる可能性
→ 学び全体はスタディログ等で学校が把握・支援するとともに、活動ごとの責任の所在や情報の管理主体の明確化が必要
- ICTも活用し、自分のペースで学びを調整したり、学校外のリソースを活かした学びを進めたりすることが可能
- 多様な教職員集団や様々な学校外のアクターが関わることにより、子供たちの認知の特性・関心により応じた教育の展開が可能



- ユーザーによる最適化
- 専門化で質の向上
- ×責任の所在の不明確さ

目指す
ところ

同調圧力・正解主義から脱し、

- ①一人一人の認知の特性を踏まえてその力をさらに伸ばす刺激を与え、その伸びを可視化し、
- ②他者との対話を通じて「納得解」を形成する場が不可欠

【学ぶワクワク感】【教科の学びが自ら設定した課題を探究する上で活きるという実感】【自分の学びを自分で調整する主体性】

乗り越え
るべき
壁

①教科書の活字を一齐授業で理解し、それをペーパーテストでアウトプット・測定という学習サイクルで評価できる
特定の能力(例:素早く正確に解く力)のみを重視する学校教育の慣性

②学校種(幼・小・中・高・大・特別支援学校)、学校や学年、学級、教科などの縦割り構造

③学びや進路の選択を制約する社会的・文化的バイアス

例:認知の特性に由来する学校へのなじめなさ、理系を選択したり理工農系学部に進学したりする女子生徒の不自然なほどの少なさ

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のためのリソースの確保と再配分

今後、5～10年にわたる制度の改善やリソース(時間、人材、財源)の確保・再配分が必要。

その実現には、各府省等や関係者が確実に取り組むための見取り図とそれを踏まえた実行が急務。

＜これまでの議論を踏まえた考えられる施策＞

01



時間

- 教科の本質等を踏まえた教育内容の重点化、探究的な学びの充実のための教育課程の弾力化等
- 情報端末の活用、教育デジタルコンテンツプラットフォームの構築・運用
- 探究力等を評価するための科学的知見を活かしたパフォーマンス評価の確立、大学入試の改善
- Giftedの子供たち含む学校になじめない子供たちのオルタナティブな学びの場の確立
- 高校普通科改革を推進するためのインセンティブ設計
- 文理のアンバランスの解消(入試科目の改善、大学(学部)専攻ポートフォリオのリバランス)
- 小学校段階の理数教育の強化

02



人材

- 多様な人材が学校教育に参画できるよう教員免許制度の基本構造の転換や多様な勤務が可能となる勤務制度の在り方の検討、特別免許制度等が実動するための仕組みづくり
- 民間企業や大学等、多様な主体がSTEAM教育や探究力育成に参画するためのエコシステムの確立
- STEAM教育や探究力育成、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現するための教職員体制の在り方
- 探究活動やSTEAM教育のコーディネートや外部機関とのマッチング機能を果たす人材の配置

03



財源

- GIGAスクール構想を持続可能とするための、国費、地方財政措置、家計負担等の再配分
- 教育の質的転換を図るための教師の処遇や配置の在り方の検討
- 学校の適正規模や配置、教育委員会の規模の在り方の検討
- ➡教育行政の「科学化」が急務